

# 農福連携マッチング実践のために、今できること

農福連携の取組を推進するためには、農業サイド(農作業を委託する農業経営体等)と福祉サイド(受託する障害者就労施設等)の両者のニーズをマッチングする仕組みを構築することが重要となる。

九州管内においては、国内でひとつの先駆けとなるマッチングの取組として、県・JA・社会福祉法人が連携して農作業の共同受注作業に取り組んでおり、その後、九州管内の地域内においてもマッチングの仕組みの構築を模索する動きに応じて、九州地域農福連携推進情報連絡会(九州農政局・九州厚生局・各県の農業部局・構成部局)を立ち上げてマッチングに係る取組を加速するための支援を進めているところである。

一方、マッチングに取り組んだ先行事例では、(1)マッチングの形態、(2)その発展過程、(3)行政による財政的・人的支援の形態、(4)農業・福祉関係団体の連携形態、(5)マッチングの対象(地域・品目・障害者)、(6)コーディネーターの育成方法等、そのスタイルは様々であり、マッチングに取り組もうとしている地域では、当該地域の特性(地理的社会的立地・農業の態様・福祉施設の立地状況等)に最も馴染むマッチングの仕組みはどのようなものなのか思案しているケースがある。

本誌は、マッチングに取り組んだ先行事例について、マッチングの様態を類型化し、上記(1)～(6)の観点等から調査・分析を行った上で、類型毎にその利点、成果を得るポイント、留意点、課題等をわかりやすく整理し、農福連携に取り組む地域におけるマッチングの仕組みづくりや農業・福祉双方の関係者の人材育成につながる「農福連携マッチング実践のための参考書」としてとりまとめるものである。

九州農政局

## contents

本書「ノウフク・マッチング・ハンドブック」の手引き	3
農福連携の類型とマッチングポイント	4
ノウフク・マッチング・Q&A	8

## 第1部 実践編(優良事例分析)

白鳩会(鹿児島)	13
こころん(福島)	17
おにの家(埼玉)	21
にんじん舎の会(福島)	25
なのはな村(宮崎)	29
オキス(鹿児島)	33
誠晃(鹿児島)	35
江口農園(佐賀)	37
ソルファコミュニティ(沖縄)	39
ポノポノ(宮崎)	41
あまみん(鹿児島)	43
翔(熊本)	45
ライズ(鹿児島)	47
太陽の家(大分)	49
オルタナ(熊本)	51
みんなにやさしい畑(千葉)	53
行政との連携による農福連携の実践	55
・鹿児島県大隅地域振興局	
・大分県竹田市	
・沖縄県北中城村	
・宮崎県	
優良事例分析	59
優良事例分析に見る	
農福連携の広がり地域共生社会	69
～農福連携が呼び起こす	
新しいネットワークの可能性～	

## 第2部 理論編

農福連携政策の背景と沿革	71
6次産業化と農福連携	77
～地域活性化とソーシャルキャピタル	
(社会関係資本)の視点から～	
SDGsと農福連携	81
～地域活性化と持続可能な	
社会づくりのための越境力へのチャレンジ～	
農福連携とバイオフィリア	85
～農作業が障害のある人に向く理由～	



活動  
理念

「おにの家」という名は、浜田広助の童話「泣いた赤おに」に由来。「ノーマライゼーション社会をめざして、ハンディのある人もない人も共に働く」

ここがpoint!

●「施設らしくないかたち」を理念に、利用者と地域住民の垣根をなくす  
●付加価値の高い手づくり商品により、顧客の共感を創出  
●利用者に適した仕事づくり、運営維持のための経営多角化

■ PROFILE

特定非営利活動法人 おにの家 (H18.4.3認証) 埼玉県熊谷市  
代表:尾島茂 支援スタッフ35名 グループホーム入居者15名  
おにっこハウス利用者15名

■ 事業概要

味噌製造・養鶏・直売所・カフェレストラン・ワークショップの開催  
就労継続支援B型事業所:おにっこハウス  
グループホーム:ハイツ桜ヶ丘 過半数は知的障害者、精神も数名

■ 地域の現状

ハンディのある人もない人も「一緒に働ける場、気軽に遊びに来られるところを作ろう!」と1987年に小さな味噌屋を始めたのがおにっこハウスの始まりだった。グループホームは地域の中に根を張り自分なり埼玉県熊谷市は味噌の原料となる大豆の産地であった。グループホームは地域の中に根を張り自分なりの生活=人生を作れる場所を目指して、オープンした。作業所の生産活動は、喫茶・店舗班、味噌仕込班、味噌・光景班などに分かれる。全体の運営は6名の理事からなる理事会を中心に、出志者(おにの家用語で出資者のこと)、地域のボランティア、商品購入者などによって支えられている。

■ 農福連携をはじめたきっかけ

地元の鉄道マンだった尾島氏は音楽仲間と一緒に福祉施設を回る音楽ボランティアを続けているうちに、障害者と働ける場所を作ろうと一念発起。1987年、尾島氏、障害当事者、ボランティア仲間と一緒に味噌造りをはじめたのがスタートだった。当初は尾島氏の個人事業としての経営だった。味噌に着目したのは尾島氏の祖母の手作り味噌の味がよく、これなら商品化できるのではないかとい

う見込みであった。当初「おむすび長屋」の指導も仰いだ。当時、政府は減反政策をすすめており、地元農家は転作として大豆を栽培していた。そこで地域の農家から大豆を購入し、農家を支援することにもつながった。それだけでは経営が安定しないため、平飼いで養鶏をはじめた。



■ 沿革(画期区分)

- 昭和62年(1987) 味噌製造スタート
- 平成8年(1996) 「小原ホーム」開所(※現在閉鎖)  
ホームでは入居者が交代で料理をするという珍しいスタイル「おにっこハウス」開所。  
手づくり味噌や地卵をはじめ、近隣の福祉施設や農家の野菜等の販売も行い、コミュニティレストランとして機能している
- 平成9年(1997) 「こうなん福祉作業所」として再出発
- 平成18年(2006) グループホーム「ハイツ桜ヶ丘」開所
- 平成27年(2015) 借用期間が切れたため現在地に移転・新築  
県産材を使った木造建築で「埼玉県産木材利用事例集」にも掲載
- 平成30年(2018) 「小原ホーム」の老朽化に伴い「ハイツ桜ヶ丘第2」開所  
現在の売上はカフェ5,500万 味噌2,500万 養鶏1,100万程度に発展

■ おにの家のマッチングストーリー

「施設らしくないかたち」を理念に

理念は「あまり大きな集団ではなく、小回りのきく小さな集団で、地域の中で普通に暮らすことのできる施設らしくないかたちをめざしている」。

味噌造りは根気の要する作業に適した人や単独での作業に適した人が担当し、養鶏は養鶏場の清掃から給餌、採卵、洗浄、卵の配送までを利用者が担当(卵の検品や代金回収は職員が担当)している。

やがて、営業の大事さに関眼し、卵の配送等を開始した。当初、卵の配達には尾島代表のご息が保育園勤務だったことを活かして子どもの送迎ルート上で販路を開拓し、少しでも燃料費や人件費などに無駄のない方法を試行した。今でもそのルートは販路の一つとして残っている。

